5 殺ダニ剤の屋内塵性ダニ類に対する忌避効果とダニの行動への影響

○橋本知幸, 水谷澄, 新庄五朗(日環センター・環境生物)

Effect of several acaricides on the action of house dust mites.

Hashimoto T., Mizutani K. and Shinjo G.

殺ダニ剤や忌避剤に用いられている IBTA, 安息香酸ベンジル(BB), サリチル酸フェニル(PS), フェニトロチオン(Fe), ペルメトリン(Pe), S-421および deet のケナガコナダニ(Tp)および, コナヒョウヒダニ(Df)に対する忌避効果を, それぞれの繁殖培地を用いる方法で評価した。上記薬剤の中では, IBTA とPSのみが50mg/m²のろ紙処理で, 両種のダニに対して90%以上の忌避効果を示したが, Tpに対するS-421とDfに対するFeは, 最高薬量の5g/m²でも60%未満の忌避率にとどまった。忌避効果の持続性は, IBTA 5g/m²処理がもっとも高かった。また, 各薬剤のドライフィルム面にダニを放逐し, 時間経過に伴うダニの行動を詳細に観察したところ, 薬剤処理面を徘徊するうちに徐々に動きが緩慢となって行動停止する個体と, 異常興奮の後にノックダウンする個体が見られた。特にIBTA, BBおよびdeetは両種のダニに対して, ノックダウン効果よりも行動停止効果のほうが高かった。また, 供試薬剤の中ではdeetの速効性が顕著であったが, 同じ薬剤でも速効性に種間差が認められた。

7 ケブカクロバエの卵巣休眠とエクジステロイド活性

○森林敦子, 主藤千枝子, 倉橋 弘(感染研, 昆虫医科学部)

Ovarian diapause and ecdysteroid activity in *Aldrichina grahami* (Diptera: Calliphoridae)

Moribayashi, A., Shudo, C. and Kurahashi, H.

日本産ケブカクロバエ *Aldrichina grahami* (Aldrich) は秋から春にかけて低地で発生を繰り返すが, 夏には暑い低地をさけて標高差移動をして高地にて卵巣休眠して越冬するといわれている。卵巣休眠は好適温度(20°C付近)長日(16L)条件下で卵から発育した成虫に誘導される。好適温度で短日(11L)で飼育されたものの濾胞発育は7日で完了する。好適温度で, 短日, 長日の条件下で飼育され, 羽化した成虫の日齢と濾胞の発育, エクジステロイドの活性, 体重の変化を調べた。短日条件下で飼育された4日齢の個体当たりエクジステロイド活性に山が観察されたが, 長日条件下では連続してどの日齢でも羽化時とほぼ同程度の低い値を示した。休眠中の雌成虫のエクジステロイド活性は羽化時点と同じ低レベルで推移することが予測される。

6 兵庫県六甲山系におけるタカサゴキララマダニの季節消長 藤本和義(埼玉医大, 医動物) The seasonal activity of *Amblyomma testudinarium* Koch in the Rokko Mountains of Hyogo Prefecture Fujimoto, K.

兵庫県の六甲山系において, タカサゴキララマダニの季節消長を旗ずり法によって調べた。また, その季節消長を解析するために, 野外採集した若, 成虫の活動を屋外に置いたプラスチック円筒内で観察した。幼虫は植生上では春に活動のピークをもつ一峰性の季節消長を示した。この幼虫の季節消長は他種と比較して特異的であった。若虫は植生上では春に活動のピークをもち, 春から秋までみられた。春に採集した若虫はプラスチック円筒内では春から夏に活動がみられ, 秋にはみられなくなった。これは秋に植生上でみられる若虫は幼虫から新たに脱皮した若虫であることを示唆する。成虫は採集数が少なかったものの, 春と秋に採集された。春に採集された成虫はプラスチック円筒内では春から秋に活動がみられた。この成虫の活動からみて, 幼虫の活動が夏から秋にみられないのは不自然であると思われる。

8 ナミビアのクロバエ

○倉橋 弘(感染研, 昆虫医科学部), A. H. Kirk-Spriggs (ナミビア博物館, 昆虫部)

The blow flies collection preserved in National Museum of Namibia (Diptera: Calliphoridae)

Kurahashi, H. and Kirk-Spriggs, A. H.

熱帯アフリカ区のクロバエ相については Zumpt (1956, 1958)のモノグラフによりまとめられている。しかし, その後の研究は少なく, ナミビアのクロバエ類についてはよくわかっていない。国立ナミビア博物館所蔵のクロバエ科昆虫のインベントリーを実施し, ナミビアのクロバエ相の解明と実用的な種の検索表をつくる作業を行った。郵送された乾燥標本670点について倉橋が同定したところ, 17属33種を記録した。ほとんどは熱帯アフリカ区固有種であったが, 分布の広いヒツジキンバエ, ヒロズキンバエ, *Rhinia apicalis* (Wiedemann)等も含まれていた。また, ヒトクイバエ *Cordylobia anthropophaga* (Blanchard)やヒトチスイバエの1種 *Auchmeromyia bequaerti* Roubaud等のヒトに寄生する重要種の標本も多く含まれていた。衛生動物の国内への侵入・移入について注目されている現在, 日本から遠い地域の衛生上重要な種についても同定できるように準備をしておく必要がある。そのためにデュープ標本は感染研昆虫医科学部のレファレンス・ミュージアムにレファレンス標本としてもらい受け, 利用できるようにした。